

まもなく1学期が終わる

2・3年生が既に国語で勉強した中島敦『山月記』に次の一節があり、先日この部分を思い出した。

「まったくどんなことでも起こりうるのだと思うて、深く懼れた。しかし、何故こんなことになったのだろう。分からぬ。全く何事も我々には判らぬ。理由も分からずに押し付けられたものを大人しく受け取って、理由も分からずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ。」

博学才穎（はくがくさいえい：学識が豊富で才知に秀でていること）で将来を嘱望されていた李徴であったが、その狷介（けんかい：自分の信じることを固く守り、他人に心を開こうとしないこと）な性格と詩作への強い思いから、姿が虎に変わってしまった自分を嘆いて、かつての親友袁傖に語った言葉だ。

コロナ禍はまさにこの李徴の言葉が腑に落ちる。昨年の1学期の前半に休校措置が続いていたことを考えると、今年度は学校に通うことができ、部活動も実施でき、友達との会話もできるので、随分ましにはなったと考えられる。しかし、マスクをはじめとする感染拡大防止対策の中で、まだまだ息苦しさを感じていることも事実だ。そんな中、本校では単発的には感染者も確認したが、クラスターは発生せず、皆さんのご協力に改めて心から感謝したい。また、6月には生徒の皆さんの一人ひとりの命について考える事案が発生したこともあり、この李徴の言葉につながった。

李徴は、虎になってしまったのは「我々生きもののさだめ」だと受け止めざるを得なかったのだが、李徴にとっては、「妻子の安否より自分の詩業」を気に掛けるということで、ある意味自業自得であろう。

一方、生まれ育った環境など自分で決められなかったものは、『宿命』として、一人ひとりの人生に少なからず影響を与えることは間違いないし、抗（あらが）えない部分もある。しかし、ベートーベンの『運命』ではないが、それぞれの『運命』をそれぞれがどのように演奏するかは、それぞれの手にかかっている。スコアは同じでも演奏の仕方では聴こえ方は変わるのだ。（河合隼雄『こころの処方箋』より）

先日終了したドラマ『ドラゴン桜』の中で、主人公桜木が東大を目指す東大専科の生徒に次のように熱く語っていた。

「自分の将来は周りが決めるんじゃない。世の中の流れに乗るものでもない。自分の人生は自分で見つけろ。人生はどうなるかじゃなく、どうするかだ。大きく強く一步を踏み出せ。その一步に全力で挑んでいけ。」

「今、この瞬間が未来を創るんだ。1日1日を無駄に過ごすか、1分1秒にベストを尽くすか、どちらを選ぶかは、お前次第だ。」

まさに「We keep on challenging.」だ。

新生徒会発足

7月13日に生徒会の認証式を行った。新たな挑戦に身を置き、自らを成長させるとともに、本校のために何ができるかを考えて行動しようとしてくれる新生徒会のメンバーに、改めて敬意を表す。

また、これまで本校のために、尽力してくれた旧生徒会のメンバーに心から感謝したい。

今年度からの「挨拶日本一の高校を目指して」という取り組みに対して、旧生徒会のメンバーを中心に、軽音楽部の皆さんとともに朝の挨拶運動を継続してくれていた。大変心強い。日毎に自らさわやかな挨拶を行うことのできる生徒の皆さんが増えつつある。目標は「挨拶日本一の高校」だ。その目標に対して、どういう戦略を立てて取り組んでいくか、新生徒会に任せてみたい。

We keep on challenging. 挨拶日本一の高校を目指して 文責：姫路別所高等学校長 篠原 歩